

-岡山醫學會第54回總會演說抄録

第 2 日

午前9時開會

講 演 ○印は講演者

66) 後方後頭位分娩例

中村 眞太郎 (婦人科)

後方後頭位は異常分娩機轉であり、又非常に稀有なものである。25歳、初産婦で、妊娠8箇月頃から妊娠腎を合併し、鋭意治療中であつたが、遂に子癇前症に移行し、剰へ早期破水を合併し來院した。通常の骨盤外計測によつては正常値であるが、骨盤出口に於て恥骨弓は極度に狭く、骨盤の内部經線に異常が想像された。強烈な陣痛にも拘らず、分娩は遅々として進行せず。内診の結果第1後方後頭位と診斷された。加ふるに母體一般状態險惡で、胎兒心音も悪く、鉗子分娩によつて、體重2160g、身長49cm男子を得て、母兒を救助した例で、妊娠腎は分娩終了後急速に治癒した。これに文獻的考察を加へて述べる。

67) 妊娠に合併せる ランドリー 氏麻痺の1例

石井 忠信 (婦人科)

最近余は妊娠末期にランドリー氏麻痺を合併せる興味ある1例に遭遇せり。患者は28歳初産婦にして妊娠8箇月初期に何等認むべき誘因なくして突然下肢の麻痺を來し上行性に上肢に及び、其の後上肢の麻痺輕快するも下肢の夫れは輕快せざりしを以て9月28日入院治療を受けり。然るに更に輕快の傾向を見ず、依つて10月13日第2度の狹骨盤も合併せるにより腹式帝王切開を施行し稍々輕快するを見たるものなり。

68) 新産兒に見たる先天性舌癒着症例

河崎 泰 (婦人科)

31歳、4回經産婦、第2前頭位で、體重3200gの男子を滿期安産した。新産兒に輕度の呼吸困難を認めたと、分娩翌日母乳が鼻腔から溢出するに氣付き、診察すると、舌は正常の半分大で、先端が稍々分裂して心臟型となつてゐるが、舌小帶癒着のためと解せられる。(Ankyloglossum congenitum) 尙ほ其の他下顎發育不全症、口蓋披裂を合併してゐた。妊娠中母體は下肢に輕度の浮腫がある外異常なく、分娩も異常なく、胎盤其の他胎兒附屬物も正常であつた。猶ほ遺傳的關係、血族結婚も否定してゐる。

69) 子宮の位置と便通との關係

高井 茂生 (婦人科)

産婦人科外來を訪れる患者のうち慢性便秘を持つて居る者は相當多數ある。從來子宮位置異常殊に後傾後屈を有する婦人は排便時の苦痛のため益々便秘を増進し、後屈症の苦しみを更に増悪せしめると言ふ風に考へられて來て居るのであるが果して然うであるかどうか。余は主としてこの事を確めるため昭和9年4月より現在に至る間の、岡山醫科大學産婦人科外來を訪れた患者に就き、子宮の位置と便通との關係を調査したるを以て茲に報告し度いと思ふ。

70) 難治なる膀胱腔癒治験例

三好 功 (婦人科)

33歳、2回經産婦にして、2回目の分娩に際し、分娩豫定日超過、兒頭過大の爲め某醫により鉗子娩出を試みられしも娩出不可能の爲め穿顛術を行ひたる由、それ以來尿失禁、血尿、排尿時疼痛を

訴へて當科に入院せり。入院時所見としては、指頭大の膀胱腫瘍を形成し、膀胱鏡検査によれば、瘻孔周囲は發赤腫脹し、白色の苔を以て被はれ、又細菌検査により大腸菌を證明し、明かに膀胱炎を併發せるを認めたり。入院後膀胱炎の治療をなし、分娩後約2箇月目にFüth氏法に従ひ手術をせしが、瘻孔が餘り左方に偏在せし爲め縫合不充分にして創傷左端哆開せり。従つて2箇月後左側にSchuchardt氏法切開を加へ、再手術をなし、創傷は完全に癒合し、従つて主訴は全く治癒し、感謝の念に満ちて退院せり。この治験例に經驗せるを諸事項を報告す。

71) 術後血栓靜脈炎の統計例

三浦久也(婦人科)

昭和9年4月より17年3月に至る婦人科手術患者2676例中25で1)發生頻度は0.94% 2)術式に對する頻度は廣汎性2.8% 全摘4.37% 陰上部切斷1.9%にして手術的侵害の大なるものに比較的大 3)疾患別による頻度は子宮癌1.8% 筋腫1.5% 絨毛上皮腫16%にして悪性腫瘍特に絨毛上皮腫16%にして悪性腫瘍特に絨毛上皮腫に著し 4)發生側は左22右1兩側2にして殆ど左側に限らる 5)術前血液検査、循環機能検査の結果は血色素量50%以下のもの76%にして著明の貧血を呈せるもの極めて多く又Katzenstein氏法の結果は不良なるもの72%に及べり。

72) 「ビタミン」 B_2 の胎兒、新産兒に及ぼす影響

前田武和(婦人科)

白鼠を用ひ「ビタミン」 B_2 の胎兒及び新産兒の發育に及ぼす影響を實驗的に研究した。即ち交尾後分娩に至る迄毎日大量「ビタミン」 B_2 を投與して其の新産兒の發育の良好なること及び分娩直後よく母獸に同劑を投與して其の仔獸の發育振を觀

察し之亦同様に良好なるを認めたり。

73) 人胎兒腦下垂體前葉の細胞學的研究

古市正典(婦人科)

妊娠4箇月乃至10箇月に到る胎兒並に新産兒50例につきて腦下垂體前葉の組織學的檢索を行ひたり。抑々腦下垂體前葉の組織に關しては、既に田部教授によりて詳細研究發表せられ、各種細胞の獨立性に關し4種説を提唱せられたり。余は之に従ひ人胎兒腦下垂體について前葉各種細胞の量的關係を檢査せるに、未分化性染色細胞大多數に於て50%以上を占め、分化性染色細胞は好酸性細胞と同數或はそれ以下にして好鹽基性細胞最も少量なるを認めたり。尙ほ最も少量なる好鹽基性細胞と雖も既に妊娠4箇月胎兒に於て明かに認めたり。各種細胞の性別相違は量的相違にして餘り顯著ならず。更に各種細胞の分泌相に關しても、全く田部教授の唱ふる如き種々相を明かに證明したり。

74) 正常婦人基礎代謝に及ぼす超短波間腦照射の影響に就て

秋山頼光(婦人科)

爾に余は子宮發育不全症並に去勢患者に就て基礎代謝を測定すると共に、かかる症例に超短波に依る間腦照射を施行し、其の基礎代謝に及ぼす影響を檢索するに本照射は子宮發育不全症に最も效果的に作用し、異狀基礎代謝の調製作用顯著なるに反し、去勢例に於ては顯著なる効果を見ざりき。余は上記實驗に引き續き産婦人科入院患者若しくは外來患者の中、比較的健全にして正常婦人又は正常婦人に近きものと思はれるものに、超短波間腦照射を施行し、内分泌、植物神經系の正常なりと思はれる例に於ける超短波間腦照射の高位中樞に對する作用を作つて生ずる基礎代謝の變動値より推定せんとするものなり。

75) 攝護腺肥大症における血液並に尿化學的所見

大村 順一 (皮膚科)

攝護腺肥大症患者において血中殘餘窒素, 糖, 「クロール量」並に尿中尿素, 血中尿素を測定し, スタイナー氏第2結紮術及び Collings 式「電氣メス」による電氣切除術の結果を検索せり。詳細は追つて原著にて發表すべし。

76) 珊瑚樹狀腎結石の形態に就て

花房 秀孝 (皮膚科)

昭和15年より同18年に到る間香か教室にて經驗せる珊瑚樹狀腎結石の9例に就き其の「ビエログラム」, 剔出腎寫眞, 結石寫眞等を供覽, 又結石分析の結果を發表せり。其の後結石の形態を考察す。この詳細に就ては追つて原著に發表の豫定。

77) 最近10箇年間に於ける「アンチピリン疹」の統計的觀察

檜垣 登 (皮膚科)

年齢別では20—50歳の間が32例を算し, 最も多し。性別では總數41例中男子22例, 女子22例にして男女同數なり。職業別では商業7例, 社員4例, 官吏6例, 農業9例, 職工6例, 無職12例なり。發疹部位は軀幹, 四肢に好發し74.4%を占む。發疹の種類及び色調には紅斑最も多く, 44例中38例を算す。紅色, 紅褐色最も多く, 黒褐色, 暗紫色, 褐色之に次ぐ。發疹の大き及び形狀, 扁豆大より手掌大の間にあり。貨幣大最も多し。發疹の形は圓形最も多く, 橢圓形之に次ぐ。自覺症狀としては瘙癢を訴ふるもの最も多く, 壓痛及び偶發性疼痛を有するもの, 灼熱感を有するものは稀なり。

78) 色素性乾皮症に於ける植物神經系統の機能障礙に就て

林 雅夫 (皮膚科)

本症患者2例に就き植物神經系統の機能を検査せり。殆ど反應なきも, ごく輕度に「アドレナリン」に對しては, 血壓, 脈搏に於て, 「ピロカルピン」に對しては, 呼吸に於て反應を示せり。詳細は原著に譲る。

79) 腎腫瘍のレ線診斷に就て

藤原 聞一 (皮膚科)

腎腫瘍の診斷は臨牀上重大事項なれども必ずしも容易ならず, 殊に早期に於て然り。腎腫瘍の治療の見地よりすれば早期診斷が肝要なれども從來の診斷法にては尙ほ不満足の點多かりしがレ線診斷の發達に依り稍々其の目的を達せられるに至れり。其のうち輸尿管性「ビエログラフイー」に依ると腎腫瘍時に腎盂の形態的變化現はる, 腫瘍増殖のために腎盂が壓迫的, 崩壞的變化を蒙るためなり。本法に依れば臨牀的に腫瘍を觸診し得られぬ程の早期に於ても確實に診斷する事を得。「ビエログラム」の病變は(1)充盈缺損, (2)腎盂, 腎盞の擴張, 伸長, (3)腎盂像境界の不明瞭, (4)輸尿管走行の彎曲なり。演者は昭和12年來, 當科を訪れたる腎腫瘍患者のうち比較的多數を占むる所の惡性腫瘍なるグラウイツツ氏腫瘍と腎盂腫瘍なる乳嘴腫とにつき其の「ビエログラム」所見と摘出腎に於ける病竈とを一々比較せるに兩所見の略ぼ一致せるを見たり。腎腫瘍診斷上レ線は必ず應用さるべきものと思ふ。

80) 實驗家兔徽毒に於ける含水炭素新陳代謝に關する研究

黒山 眞吾 (皮膚科)

詳細は岡山醫學會雜誌第55年第5—8號に發表の豫定。

81) メニエル氏病に對する迷路内「アルコール」注入に就て小田 大吉 (耳鼻科)
宮本 正明

メニエル氏病に對する外科的處置としての頭蓋内前庭神經切斷に關しては昨年の本會に於て小田之を紹介せり。今回は高度の聽力障礙あるものに對して、迷路内「アルコール」注入療法を行ひし、27年の男子に於ける一治験例を紹介し、頭蓋内前庭神經切斷と迷路内「アルコール」注入との選擇は聽力殘存の程度による可く、既に言語を聽取し得る聽力を失へる患者に對しては、前者に比して操作簡短なる後者を選ぶ可きを指摘せり。

82) 聽器の年齢的變化に就て

福 武 豊 次 (耳鼻科)

演者は種々なる年齢の人體聽器の組織學的検査により、其の蝸牛各迴轉に於ける聽神經終末纖維、コルチ氏器の變性の範圍をガイド、クロー、小田の象型造複法により計測し之を正常聽力を有するものの夫と比較し、又鼓膜張筋を其の筋纖維及び平均横斷面積は「プラメーター」を使用して精密に測定し、之より年齢的變化あるを認め、之等聽器の中老年者に於ては從來老人性難聴に於て變化ありとされたるコルチ氏器、螺旋神經節並に節外神經纖維に變化なく却つて鼓膜張筋に高度の萎縮あるもの尠からざるを認めたり。

83) 梨子状窩異物(魚骨)に因る深頸部蜂窠織炎の1例に於ける臨牀竝に剖檢的觀察

福 武 豊 次 (耳鼻科)
野 村 謙 二

患者は62歳の農夫。2箇月前より漸次咽喉部に嚥下痛、通過障礙、聲音の嘎嘶を來たし來院3日前より右側頸部に腫脹を起し軽度の呼吸困難を來たせり。本例は來院前2人の専門醫より喉頭惡性腫瘍の診斷を受けし者に魚骨を誤嚥せる既往歴なく經過緩慢にして外頸部腫脹は板狀硬にして壓痛の他炎症症狀を缺き、喉頭鏡所見にても右側梨子状窩側壁に一部汚穢なる潰瘍を認め、其の周圍、

右側披裂軟骨部、假聲唇は腫瘍狀に腫脹し右側聲唇は全く働かず炎症よりも寧ろ惡性腫瘍を思はしむるものありたり。右側頸部腫脹の試験穿刺により初めて深頸部に化膿竈あるを知り茲に初めて異物によるにあらざるやと考へ咽頭間隙を廣く開放し消炎療法に努めたるも敗血症様症狀の下に術後5日目に死亡せり。剖檢するに右側梨子状窩に外頸部切創に通じ内部に魚骨を有する拇指頭大の膿瘍あり之より咽頭間隙蜂窠織炎を惹起し更に頸靜脈周圍淋巴腺炎より頸靜脈血栓を形成せるを認め、尙ほ直接の死因は兩側嚥下性肺炎なるを認めたり。

84) 小兒に於ける扁桃腺摘出後の状態に就て

福 武 雅 重 (耳鼻科)
遠 藤 正 孝

小兒に於ける扁桃腺障の處置としては、從來扁桃腺切除を以て處理せられて居る場合が多いが小兒なる故扁桃腺切除、大人なる故扁桃腺摘出と言ふのでなく、小兒と雖も、習慣性の扁桃腺炎を繰り返すものに於ては扁桃腺摘出を行ふを妥當と考へ、當教室にては、近來滿3年以上の小兒に就き之を實施せり。昭和14年より昭和16年に互る3箇年間に行へる小兒の扁桃腺摘出後の成績を調査せる所(141例中回答ありし90例に就き)次の如き結論に到達せり。1. 扁桃腺摘出後發育阻害せられしもの、結核を誘發せるもの、其の他全身或は局所的障を惹起せるもの認められず。2. 大多數に於て(92%)風邪に侵されず或は風邪に侵さるも高熱認められず。3. 半數以上に於て發育良好を示せり。

85) 「ムコーズ」中耳炎に對する藥物療法の限度に就て

寺 島 四 朗 (耳鼻科)

「ムコーズ」中耳炎は時に保存的療法殊に「ズ

ルフアビリヂン」により治癒する場合あり、併しながら又之により不完全なる治癒と、元來症狀の極めて不明なる本症の特性の爲に外觀上治癒の状態にありながら後突然頭蓋内合併症を來たすが如き場合も少からず、之を如何に使用すべきや慎重に検討する要あり。この點に關し演者は昭和8年より昭和17年迄10年間教室に於て手術せし本症156例の経過、手術的所見並に合併症發來の時期等を検討して 1) 本症に於ける側頭骨内板の肉眼的融解は多く4週間以後に於て見られ、3週間以内に見られることは少い。2) 化膿性腦膜炎、横洞血栓、腦膿瘍の合併は第4週以後に於て見られ且1例を除く總てに於ては骨内板の融解を伴つてゐた等の事實を認め以上の事實より「ムコーズ」中耳炎に對して之が發病後3週間以内であれば「ムコーズ菌」を證明したる事實のみを以て直ちに手術療法を選ぶの要なく、先づ「サルファビリヂン」療法を試み、急速に其の效果を見ざる際殊に聴力の回復せざる場合は荏苒藥物療法に頼るべからず。又4週を過ぎたるものに對しては一應藥物療法を試みて可なるも急速に奏效せざる限り手術的療法を選ぶべきを指摘せり。

86) 舌癌の療法に就て

藤山 杏平 (耳鼻科)

演者は昭和6年以降、本學耳鼻咽喉科教室に於て、主としてセーレンセンの術式による側咽頭切開により治療したる舌癌患者18例に就き其の局所所見の概略と治療成績の見るべきものありしを述べ、次で其の術式を紹介したる後本術式によれば腺の摘出並に舌動脈の結紮に至便であり、其の適用範圍に於ても舌並に舌骨の半分迄は下顎骨に觸る事なく自由に處置し得る利點あるを紹介せり

87) 三朝温泉の泉源分布状況並に其の湧出量と氣候的要素との關係

淺越 嘉威 (三朝温泉療養所)

三朝温泉の泉源50餘に就て紹介し、其の1泉源に於ける泉温並に湧出量と氣候的要素との關係に就て述べ。

88) 飲泉療法を行へる痛風の1例

淺越 嘉威 (三朝温泉療養所)
小原 美夫

痛風は本邦に於ては極めて稀有の疾患なり。近時 Neusser, His 及び Gudzent 等は痛風に「ラヂウム」療法を施行し、之によりて治療上好結果を得たることを報告し、「ラヂウム」が尿酸の溶解性を變化し、又尿酸を破壊するものならんと思惟せり。演者等は最近痛風の1例を経験せしを以て、之に「ラドン」含有温泉として知られたる三朝温泉を飲用せしめ、其の治效力を窺ふと共に尿酸代謝の一斑に就て検索せり。飲泉療法によりて痛風の一般状態並に疼痛發作に對しては明かに效果を認めたるも、其の尿酸代謝に及ぼす影響に就ては之を確認し得ざりき。

89) 健康人睡眠の統計的觀察

水川 希六 (倉敷中央病院)

昭和16年8月、倉敷中央病院附屬看護婦養成所生徒並に看護婦104名に對し、睡眠状況を統計的に觀察せり。平均睡眠持續時間は7時間14分に於て、睡眠持續時間長き例群にありては、短き例群に比して、夜中覺醒並に夢見る頻度少く、且就牀後速に眠に入る。前者にありては晝間作業中睡氣を覺ゆる者は後者に比して少きも、午睡者は前者に多し。換言すれば、健康人にありても、短き睡眠の必ずしも深き睡眠を指示せず、却て比較的逆の關係存在することの多きを知らしむ、尙ほ作業成績は睡眠持續時間の短縮に伴ひて低下の傾向を現し、學科成績は其の中藤を得たる例群に於て最優秀なり。

90) 5 日熱の 1 例竝に其の血液像變化に關する知見補遺

中根松代(倉敷中央病院)

臨牀的に規則正しき熱發作繰り返す事なく、Jungmann の所謂移行型熱型を示せる 5 日熱の 1 例に就て報告せり。而して特に熱發作と本例患者の血液像の動搖との關係に就て時間的に追究検索せり。其の結果白血球總數増加の頂點は熱發作の頂點より稍々遅れて表中中性嗜好白血球及び淋巴球の百分率の逆行的關係は熱發作に先じて著明となること分れり。本例に施せる Rickettsia の證明は不成功に終れり。

91) 多腺性内分泌臟器障礙症の 1 例竝に本邦症例の統計に就て

磯川 恕介(矢掛病院)

演者は 5 箇月前より易疲労性、全身脱力感、心悸亢進、手指震顫等を訴ふる 37 歳の男工員に就き報告する所ありたり。

主要所見としては身體末梢部特に下顎骨の肥大、肺氣腫、甲狀腺腫、速脈、手指震顫、羸瘦、多尿、糖尿、皮膚の鞏皮症様變化及び色素沈着、陰萎、鬚髯の疎をみ、更に諸検査により基礎代謝の亢進、特殊動力作用の正常、自律神經失調特に交感神經緊張状態、淋巴球增多症、胃酸寡少症、筋肉粗大力の減退、「トルコ鞍」、レ線像の正常、血糖値上昇、糖二重負荷試験のスタウプ効果陰性、「インズリン」寡血糖の強陽性、「サントモン」試験正常、血清高田氏反應及びワ氏反應陰性の成績を得たり。之等により演者は腦下垂體、甲狀腺の機能亢進、副腎、脾臟、生殖腺の機能低下が同時に存在せるを認め、且其中甲狀腺症狀稍々重きも他は略同程度の症狀にて、かくの如き廣範圍の内分泌腺の罹患及び病歴に鑑みて本症例の原發竈は決定し難しと述べ、要之に體質特異的に多數の腺が同時に原發的に侵襲を被りたるものとなして多腺性内分泌臟器障礙症の診斷を下したり。

更に演者は本邦の本症例 17 に就き統計的觀察を試み其中 1, 2 甲狀腺機能の亢進が發症に先んじて出現せる例あるも、其の他殆ど各内分泌腺が多腺的に機能低下(脱落症狀)を來せる事を知りこの點獨り著者の例は腦下垂體及び甲狀腺の機能亢進を伴ひ甚だ特色ありと強調せり。

92) 肺結核症の分類に就て

佐藤 靜馬(舊軍人岡山療養所)

肺結核症の分類に就き要求せらるべき事項は 1) 疾患の發生竝に進展の經過を示す事 2) 現症を可及的明確に示す事 3) 豫後を正しく示す事 4) 治療法と一定の關聯を有する事 5) 統計に便利であり且餘り複雑困難ならざる事の 5 項目である。現在迄の分類法は 4) 治療法との關聯に就て深い考察が拂はれて居ない。現代肺結核症の治療法は大氣安靜榮養療法、虛脫療法竝作業療法の 3 者が其の主なるものであらう、演者は以上の觀點より現代最も妥當なる分類法と目する Rehberg 氏法を一部改變したる一案を示す。即ち
基本病型。I 初期結核。1. 初期變化群。2. 肺門淋巴腺結核。3 初期浸潤性結核 (Infiltrierende Tbc)。4. 初期乾酪肺炎性結核。II (血行性) 播種性結核等。1. 急性粟粒結核。2. 慢性播種性結核。3. 重症結核菌敗血症 (Typhobacillose Landouzy)。III 慢性肺結核。1. 結核性肺浸潤竈 (Infiltrative Lungentbc)。 (a) 撒布なし (b) 撒布あり。2. 乾酪肺炎性及び氣管枝炎性肺結核。3. 結節性肺結核 (II を除く)。4. 慢性空洞性混合型肺癆。5. 硬化性竝に萎縮性肺結核。IV. 肋膜炎。 (a) 罹患中。 (b) 高度の腹膜肥厚を以て治療せるもの。 (c) 痕跡を以て治療せるもの。 (慢性肺結核にして病型判定のよるべきレントゲン線所見なきもの……IIIQ)。一般標識 病竈の擴り (1. 限局性, 2. 片側性, 3. 兩側性, 4. 全肺野性の 4 分法竝に Bräuning の 1' 2' 3' 竝に片側兩側による 6 分法を示す。病側竝に病竈部位も符號に

よりて示す。右を下に、左を上を書く。進行度(全免疫生物學的状態の總括として全身状態を重視し之を 1. 作業可能、2. 代償性、3. 亞代償性、4. 非代償性の 4 分法竝に軍事保護院に採用せる 6 級制とを示す) 開放性なりや否や(十、一にて表はす、一の時は検査法を明記す、檢鏡的 m, 培養的 k) 空洞(Kにて表はす其の有無、片側か兩側か、其の位置を重視す。尚ほ必要あれば大き(mm) 性質を附記す) 解剖學的性状(滲出性 Aa, 増殖性 Ab, 硬化性 Ac) 赤沈(R₁ 正常, R₁ 10代, R₂ 20代……) 熱(F₀ 無熱, R₁ 微熱, F₂ 38°まで, F₃ 39°まで, F₄ 40°) 結核性合併症(KA 眼結核, KD 腸結核 etc)

(記載例)

基本 病型	病 癰 の 擴 側 付 置	進 行 度	開 放 性	空 洞	解 剖 學 的	赤 沈	熱	合 併 症
----------	---------------------------------	-------------	-------------	--------	------------------	--------	---	-------------

III3 3⁸⁰_{om} 3 + K₀ Ab R₂ F₂ KD

尚ほ演者はこの分類法により傷痍軍人岡山療養所開所以來現在に至る退所者中若干名につき分類を試み今回は特に豫後との關係につき検討報告する所ありたり。

93) 赤血球沈降反應の餘切値に就て

齋藤 勉 (傷痍軍人岡山療養所)

演者は傷痍軍人岡山療養所入所者の赤血球沈降反應の餘切値測定法を中心として 1 時間値、中等價、沈降比、6 段法に就き 1. 病型、2. 熱、3. 體重、4. 咯痰中の結核菌、5. 豫後に就て臨牀的比較考察をなし之を報告せり。

94) 肺結核症の外科的療法 (第 1 報)

横隔膜神經捻除術

八塚 陽一 (傷痍軍人岡山療養所)

昭和 16 年 9 月より同 17 年末の間に肺結核症治療の目的を以て單獨の手術として施せる横隔膜神

經捻除又は壓挫術の效果に就て考察す。全例 24 例中見るべき效果を収めたるものは何れも下葉のものにして中葉乃至中野のものにも多少の效果を見る事もあり上葉のものには殆ど效果なし。術後障礙としては殆ど認め得ざりしも循環障礙、胃腸障礙等の報告もあり又或程度肺活量の減少する事等より正確なる適應症決定の上施行すべきものであり他の方法なし等の理由にて濫りに行ふべきではないと考へる。

95) 咯血の統計的觀察

上田 知二 (傷痍軍人岡山療養所)

演者は傷痍軍人岡山療養所入所者中、肺出血を來せる者に就き肺出血の頻度、持續日數、季節及び「ベット」の位置的關係其他臨牀上の若干の事項に關し統計的に觀察し之を報告せり。

96) 作業療法實施退所者の統計觀察

坪田 立也 (傷痍軍人岡山療養所)

演者は傷痍軍人岡山療養所退所者中其の入所中作業療法を實施せる者の退所後の就職狀況再發の有無再發と職業の關係等に關する統計觀察を報告せり。

97) 小兒の着衣狀況に就て

佐藤 勝美 (吳)
芳野 俊五

聖職下次代を背負ふ可き國民育成のために、現代の小兒の生活が努力工夫せられつつあるかを種種の方面より検討是正することは、小兒生活指導の一部を擔當するものの現時の急務と思考し、其の一助として乳幼初期の小兒 2072 名の着衣狀況を 2-3 の觀點より調査し、其の調査成績を述べ、之に依れば、保温の目的に對し、母氏の努力注意はかなり適正なるが如きも、尚ほ必要以上に厚着の傾向多きを認め、物資節約、小兒心身の健全保持上、小兒の着衣に就て、母氏に尚ほ一段と工夫注意する様適切なる指導をなす要多きを述べ。

97 番へ追加

稲葉 實(日 鐵)
(廣畑病院)

凡そ乳幼児の着衣状況を一定の条件下に於て極めて詳細に検することは幾多困難ありて極めて困難なることで、自分も目下検索中のもので大變參考になりました、氣温に關して各家庭の状況並に母親の習慣等幾多調査を困難たらしむる點多々あることと思惟する次第であります。

98) 小兒の食餌に對する嗜好に就て

芳野俊五 (吳)
佐藤勝美

前題と略ぼ同様の目的の下に、小兒の食餌に對する嗜好に就て2—3調査す。即ち都會在住中産家計家族の子女にして、滿3年より10年未滿の316名に就き、各種の味、比較的容易に食膳に供せらるる食品計47種に對し、其の嗜好を、又其の嗜好乃至偏食形成誘因及び母の嗜好を訊し、且小兒の環境、既往乃至現在の身體諸状態を觀察、之と對比考察を加へ、1) 小兒の好嫌はかなり多きこと。2) 母氏に偏食多きもの、又唯一子に偏食著しき兒多きこと。3) 偏食形成誘因として家族の模倣、訓育の過誤に依ること多きこと。4) 年長に向ふに従ひ國土に比較的多く得らるる魚肉、野菜を嫌ふ傾あること。5) 母が小兒に與へざる食品種類尚ほかなり存すること等より、之亦母自身の躰、教育に努力工夫せしむる様指導する要あるを述べ。

99) 監禁者尿の濱崎「ケトエノール」物質 (KES.) に就て (第1報)

原田 尙 (廣島)

尿中に排泄せられる KES. の研究は濱崎博士及び其の門下生に依つて健康人をはじめ、急性傳染病患者、結核患者等を對照として幾多貴重な研究業績が發表せられてゐる。

今回余は某警察署留置場入監者尿の KES. に就て精密なる檢索を企てた。昭和17年5月から同年10月迄に某留置場に檢索せられた健康男子のみ150名に就て、短期入監者(入監日數10日以内のもの)と長期入監者(入監日數11日以上のもの)とに大別して、夫々に就て起床時第1尿を選び、濱崎式沈澱管を用ひて詳細なる檢尿を施した。1) 短期入監者に於ける KES. 量の平均値は0.2771であつて、入監第4日目に最高値(0.3773)を示し、第5日目に於て最低値(0.1983)を示す。2) 長期入監者に於ける KES. 量は11—30日目迄のものは平均値0.1786、31—60日なるものは平均値0.1429、61日以上なるものは0.1228であつて、何れも短期入監者に比較すると其の値は著しく低く $\frac{1}{2}$ — $\frac{1}{3}$ となつてゐる。之を重盛氏の健康人に於ける統計學的觀察に依る平均値13年の0.036(最低)及び20年の0.056(最高)に比較して觀ると、入監者の KES. 量は其の短期たると長期たるを問はずに一般に同年齡の健康人に比して甚だ高い値を示してゐる。就中短期入監者に於て特に顯著である。而して入監者の KES. 量は入監日數が短期より長期に互るに従つて逐次漸減する傾向がある。扱て KES. 量の増加するのは體細胞が消耗崩壊して生ずる「プリン體」の増加する時又は食事に因る「プリン體」攝取の増加に因るのである。之に反して KES. 量の著減するのは體細胞核の再生に依つて起る「プリン體」の同化に因るのであるが、入監者に在りては「プリン體」攝取量の増加、身體細胞の崩壊並に筋肉勞働に依る KES. の増量を除外することが出来る。然るに入監者の全部に認められる著しい KES. 量の増加は激しい精神的打撃及び不眠に因る肉體的疲勞に因るものと解する他もなく、従つて入監期間が長期に互つて入監者の精神的苦痛が漸次緩解し、環境に馴れ疲勞が次第に快復するにつれて、KES. 量も亦一般健康人の平均値に近づくのである。この際濱崎博士、菅及び重盛氏等の報告せるが如く、腦組織は心臓

と共に諸臓器中最も多量に KES. を含有する臓器であり殊に脳皮質に多量であると云ふ。従つて精神的興奮又は不眠が KES. 排泄量に密接なる關係にある事實は興味ある示唆を與ふるものである。

100) 肺結核患者に對する横隔膜神經捻除術並に斜角筋切斷術に就て

原 勝 巳 (岡 山)
原 勇

肋膜癒着のため人工氣胸術實施不能の偏側の肺結核症 32 例に、内科的治療と同時に外科的處置である横隔膜神經捻除術並に斜角筋切斷術を併用して認むべき好果を得たるを以て、肺結核治療に對しては今後一層内、外科の共同的努力の必要を力説し、少く共肺結核療養所には手術室の設備を薦め以て隨時外科家の應援を求むべきであると述ぶ。

100 番に對する質問

八 塚 陽 一

Tindikation に就ての御意見を御伺ひ申し上げます。

同質問への答

本手術に對する余等の適應症は、偏側の、肋膜癒着のため人工氣胸術實施不可能なる肺結核症例である。

13 時 5 分一般講演終了。14 時より特別講演あり。

本日座長として講演を幹旋せられしは掛谷博士、緒方、津田、小田、根岸の各教授なり。